

第二章 第三百三十七師團の状況

第一節 第三百三十七師團の編成より終戦迄の状況

一、師團の編成

第三百三十七師團は所謂關東軍根こそぎ動員により昭和二十年七月編成せられたり。師團の編成は先づ大隊以上の本部、司令部人員を關東州警備隊司令官の擔任を以て安東に於て充足し次いで瀋南師管區司令官の擔任を以て爾他の兵員、兵器、被服其の他の裝備を充足せり。

師團將校の大部及一部の下士官兵（本部及司令部附）は在滿願召着を以て充當せられしが不可元用員たりし者多し。

二、師團の裝備

師團の總員は約一万名足らずなり。

師團の兵器裝備は小銃及輕重機を除く火砲其の他は開戦時尙滿洲各地より搬送中にして遂に之を受領するに至らず。

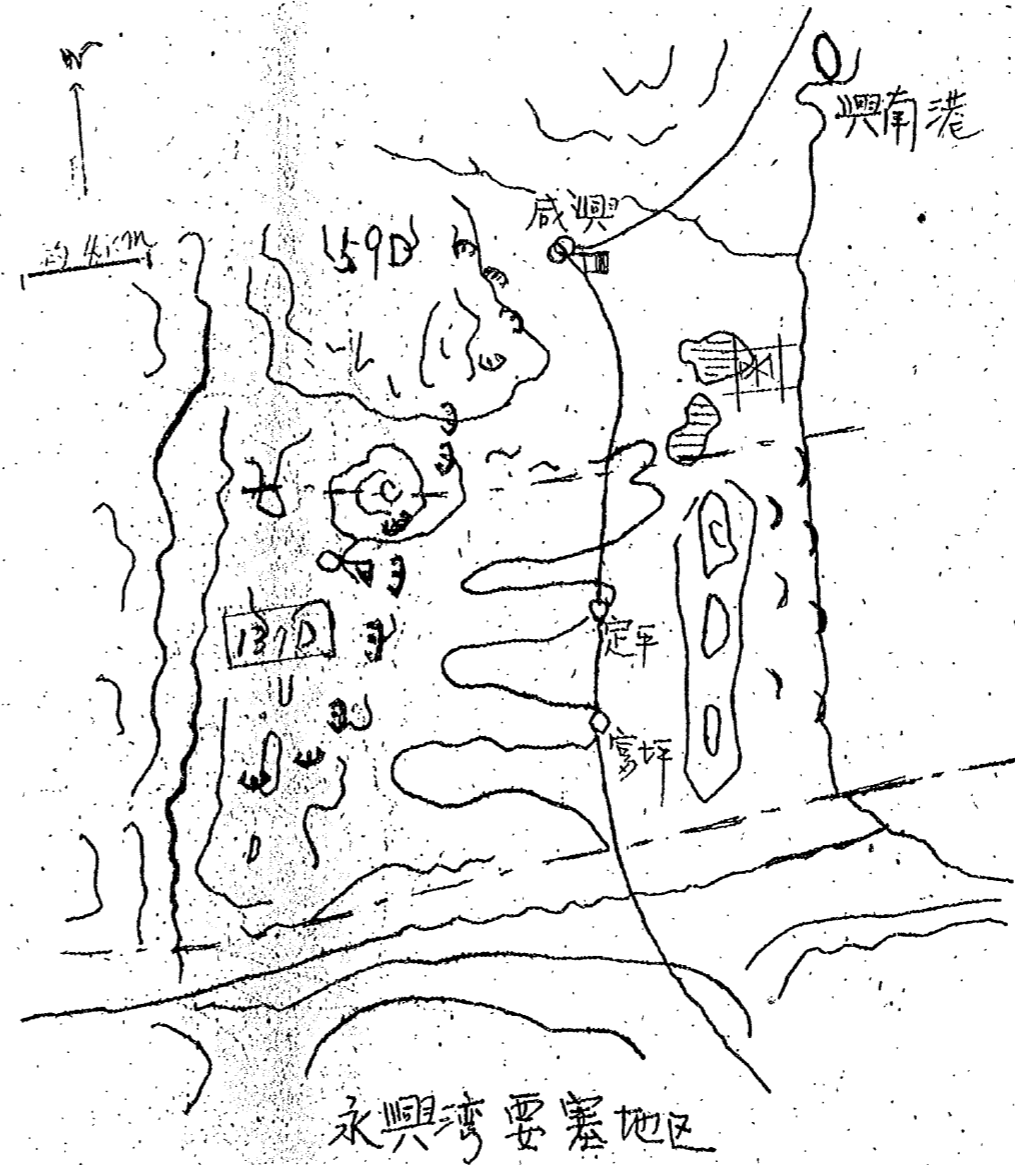
又築城、築營資材殆んどなく編成途中急ぎ兩滿に人を派し收集せし

も安平に於て交付し得たるは大敵に鎧一、中隊、第一の有様なりき近接戦  
闘資材亦極めて不足しありたり。

### 三、師團の配備

師團は軍の企図に基づき右第一線師團として次図の如く定平、富坪  
西方高地帯に縦ね東面して陣地を占領す。

0834



0835

四 師團の戦力及補給の状態

既述の如く師團は辛うじて人員編成を了したる有様にして火砲皆無、薬城及近接戦闘資材亦極めて不十分の状態なり。

糧秣も亦僅少にして屢く軍に要請せるも、終戦當日に於て師團は僅かに二日分を保有するに過ぎず、而も輸送の爲の自動貨車は僅に三輛を有するのみにして副食物は貧弱なる現地調辨の外なく極めて憂慮すべき状態に在りたり。

五 部隊の素質、團結、訓練其の他

兵員及部隊の下級將校は維爾師管區の努力に依り一般に素質良好なりしも、師團司令部部長級は何れも老齡者及病弱者、歩兵聯隊長も一般に老年者にして除務には經驗深きも戰場活動は十分ならざるべきを懸念せられたり。

更に師團の編成に方り大部の將校が在滿不可充用員より召集せられたる爲年配者にして除務未熟且訓練の余裕なかりし爲少なからず懸

念せられたり

師團としては繁忙なる隊務の間副指の速成を図り且戦闘必須の要目  
に限定して訓練に努めしめたるが、各隊長の努力と相俟ち短時日の  
間に急速に向上し來りつゝありたり。

又多敷の朝鮮人兵を含みありしが軍風紀上の事故重傷病者は一名も  
生ぜざりき。

六通信は軍司令部との間は有、無線により終始連絡を保持せられたり  
しも、隣接第五十九師團とは陣地占領に伴ふ態勢浮動の爲十分なる  
連絡を取り得ざる間終戦となりたり。  
水興灣要塞守備隊とは軍經由にて連絡せり。  
師團作戦地域内にては通信器材不足せるのみならず広地域の配備た  
ると地形錯雜のため視号通信網の構成に着手せり。

#### 第二節 終戦及爾後の状況

#### 一 指揮關係及配置の変更

日本の降伏終戦は全部隊に言ひ知れぬ衝動を興へしも幸に行動上些

の動搖紊亂もなかりき。

師團は終戦と共に軍の敷次の命令（定平、富坪地区に集結↓永興に亘る鐵道沿線に集結↓定平、富坪地区に集結↓定平、永興地区に集結）に依り集結、準備を逐次變更着手中師團は第十七方面軍直轄となり給養及治安配備の關係上歩兵一聯隊を元山に爾余の主力を平壤に移動すべく命せらる。

斯くて鐵道輸送中、元山には既に蘇軍の一部進駐せるため該方面に輸送中の歩兵第三七五聯隊は反歸して平壤に向はしめ師團最后尾部隊として蘇軍代表平壤飛行場進駐直前平壤に到着せり。  
尙師團司令部の一部は自動車五輛を以て峻難なる脊稜山系道を突破して蘇軍到着の直前平壤に到着す。

### 三、其後の状況

師團の諸部隊は平壤到着后直に平壤師管區の好意に依り同市内兵營中學校等に分宿せり。

師團の糧食は極めて僅少（二日分を携行）なりしを以て同地<sup>一七</sup>航空  
支廠、兵器支廠等に交渉すると共に第十七方面軍に連絡せる結果  
水色の集積糧秣より補給を受けることになりしが、爾後蘇側の土  
藏、關城間鐵道遮断により不通となり平壤師管區より補給を受く  
ることゝなれり。

蘇側將校の平壤到着後師管區司令官の命により師團諸隊は秋乙地  
區に移動し歩兵一聯隊は三井飛行機工場に、其の他の部隊は秋乙  
の小学校を利用する外露營せしめ、其の翌日更に歩兵下士官候補  
者隊兵營に司令部は師管區の兵器部、經理部廳舎に移動せり。

3. 蘇側は當初ラーコン中佐平壤飛行場に到着し、師管區司令官と規  
地停戦協定を行ひ、次いで蘇軍司令部到着し、秋乙地區に日本軍  
諸部隊を集結せしめ、次で美勳堂會に特校を、三合野廠舎に兵を  
收容し、其間兵器彈藥其他の軍需品を接收せり。  
被服及糧食は當初鮮人向に大部ばらまかれしも蘇側は後に至り之

を同收せり。

又蘇軍の進駐部隊の兵種兵力は不明なるも航空の外憲兵、自動車部隊、高射砲部隊等を見る。

日本軍隊及居留民に対しては一般に穏かなりしも他方入獄鮮人の解放、此等に対する裏面工作により日本人迫害逐次募り又平壤に出来たる治安維持会の対日本人態度も逐次悪化せり。

不良鮮人及蘇軍將兵の日本人追出、家宅搜索、暴行等頻發し殊に北方より南下し平壤の市内女學校等に集結し日本人は可なり困窮せる生活状態に陥れるが如きも蘇側にては何等積極的に之を救護せず辛うじて居留民会等にて蘇、鮮側と接衝し薄命を繋げり。

此の間京城より第十七方面軍參謀長井原少將飛來し、蘇側と日本軍の作戦に伴ふ処置、居留民の保護、治安保持等に關し交渉し又師管區としても蘇側と逐次交渉せるも、交渉其のものは何時



も概ね順調なりしが蘇側のやり方は全く欺瞞違約に終始せるのみ  
ならず且指令は總て突進的にして大なる困難を來したり。

殊に將校と分離された兵の三台皇威舎收容の如き混乱甚だしく名  
狀すべからざりしものありしか如く其後小生の目撃せし所によれ  
ば同威舎前後一里の沿道には軍各種兵器、軍糧、被服、衛生材料  
等程高く放棄され蘇軍將兵之を漁り、蘇入漁りブスと焦げ煙  
れる其の殘骸の有様はナボレオンのモスクワ撤退を想はしむるも  
のありき。

5. 師團は在滿願召將校大部なりしが、終戦直後清に於ては直ちに  
除隊せしめたるが如きも師團には其等のこと全く送せられず、平  
壤に到り關東軍の後退部隊より始めて耳にせり。唯若干の將校は  
希望により平壤到着直後滿洲に歸し又第二回には第十七方面軍の  
命令により平壤警察補助員として若干を派遣之等に隨時滿洲へ歸  
る様云ひ渡せるも同將校は平壤蘇系治安維持会に抑留されて威舎

に歸され又其後の情報によれば初め遺したる將校も途中捉へられ兵廠舎等に一變裝せる爲に殺せられたる者多き由なり。

又日本軍隊の廠舎收容后平壤附近に於ては蘇側の日本人狩獵隊に行はれ三合里兵廠舎に投入せられ又三合里兵廠舎よりも脱走者多かりし模様なり。

美勳堂狀校收容所に收容せられたる者は、平壤師管區部隊、北鮮西部地區（安東迄）の兵驛部、憲兵、清院、兵器支廠、航空廠、海軍炭坑の海軍將校、第一三七師團、關東軍補給監部、築城團、飛行隊、飛行場勤務部隊等の外醫寮、道知事及第一二〇師團の歩兵一聯隊等にして其等の内一部の者は投獄せられ或は蘇側により別個に拉致せられたり。

食糧、被服は各隊携行ものにより先づ當分は不足せざりき。

又收容所に於ては蘇軍將校は頻繁に検査と稱し長靴、時計、剃刀其の他私物品を掠奪せり。